

旧ユーゴスラヴィア諸国と

第二次世界大戦をめぐる歴史認識

石田信一

はじめに

ユーゴスラヴィア連邦が激しい「内戦」を伴いつつ解体してからは二〇年が経過した。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、クロアチア、マケドニア、スロヴェニア、セルビアというすべての連邦構成共和国に加え、セルビアの自治州でしかなかったコソヴォまでもが実質的に独立したものの、国家間関係も民族間関係も完全には修復されないまま残されている。

これらの国々では連邦時代の諸制度の刷新が行われてきたが、学校教育も例外ではない。とりわけ歴史教育においては、ユーゴスラヴィア諸民族に共有される広範な地域史

からそれぞれの国民史への転換が、主として民族主義的な色彩を帯びた新政権の意向の下で実現された。それは共産主義・社会主義イデオロギーに基づくテーゼからの「脱イデオロギー化」を伴うものでもあった(Najbar-Agrčić 2000: 227)。連邦時代の歴史認識がまったく新たなものに置きかえられたわけではなく、いまなお論争中のトピックも多いとはいえ、こうして拡大した歴史認識の相違は、一九九〇年代の「内戦」を助長した要因の一つとも考えられる。

ユーゴスラヴィア連邦時代から、学校教育は各共和国の管轄下にあり、それぞれのカリキュラムおよび教科書が用意されていた。すでに国民史としての側面、たとえばクロアチアではクロアチア史、セルビアではセルビア史が重視されていたことは否定できないが、広範な地域史としての

ユーゴスラヴィア（あるいは南スラヴ）諸民族史の視点は共有され、「大枠の歴史認識にそれほどの違いは見られなかった」（柴一九九六・一三三）とされる。

しかし、前述の通り、ユーゴスラヴィア紛争を経て独立した直後に各国でカリキュラムが刷新され、新たな教科書が作成された結果、現在では個々の事象に対する評価や認識に大きな隔たりが生じている。一九九〇年代末からスロヴェニアとクロアチアを皮切りに同じ科目に対して複数の教科書を認可する、いわゆる「多元化」が推進されたものの^{＊3}、こうした隔たりを埋める役割を十分に果たしているとは言い難い。全般的に南スラヴ諸民族を含めて現在の自国民以外の諸集団が教科書に登場する機会は激減し、とくにクロアチアの場合、そうした集団との対立的な局面が強調される傾向にあるとこう（Koren 2001: 132）。

本稿では、旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史認識の変化と相違がもともど顕著に見られる第二次世界大戦に関するいくつかのトピック、具体的には「クロアチア独立国」とジェノサイド、抵抗運動としてのチェトニクやパルチザンの「蛮行」といった問題を取り上げ、各国の歴史教科書における具体的な記述を比較・分析する。連邦時代ほどではないが、第二次世界大戦は歴史教科書のなかでなお大きな比重を占めている^{＊4}。しかし、各国の教科書に基本的なレベルで異同が生じていることは、たとえば大戦中の犠

牲者数に関する数字だけを見ても明らかである^{＊5}。近年の歴史学の成果を参照しつつ、義務教育段階で使用される歴史教科書を主たる対象として、それらに反映されている歴史認識について検討を加えたい。

I クロアチア独立国

一九四一年四月六日、ユーゴスラヴィア王国はドイツ、イタリア、ハンガリー、ブルガリアの枢軸軍による大規模な攻撃を受け、予期しない形で第二次世界大戦に巻き込まれることとなった。王室と政府は国外に脱出し、まもなく王国軍も降伏して、その国土は周辺諸国に分割・占領された。その際、たとえドイツとイタリアに従属するファシスト団体ウスタシャの傀儡政権であったにせよ、独自の国家を創設して最大の版図を得たのはクロアチアであった。まず、このクロアチア独立国の問題を取り上げる。

一九九〇年に制定されたクロアチア共和国憲法は、前文において七世紀のクロアチア公国に始まるクロアチア国家または国家的組織の歴史を書き連ね、その連続性を強調している。しかし、こうした歴史的連続性のなかに、クロアチア独立国は位置づけられていない。現在のクロアチア国家と結びつけられるのは、クロアチア独立国に対する抵抗

運動としてのクロアチア人民解放反ファシスト全国評議会（ZAVNOH）である。一九九〇年代にはクロアチア権利党などが中心となってクロアチア独立国の宣言がなされた四月一〇日に記念式典を催したが（Pavliković 2008: 118）、住民の間で記念日としての意識が浸透することにはなかった。

クロアチア独立国はクロアチア現代史研究において最も重要かつ論争的なトピックである。連邦時代にはクロアチア独立国をめぐって全面的にこれを否定する公式のマルクス主義的アプローチとクロアチア国家の創設を評価する在外クロアチア人らによる郷愁的・弁明的アプローチが存在したが、いずれも一面的な見解しか提示できなかったとされる（Kisić Kolanović 2002: 684）。一九九〇年代以降、このトピックへの関心が高まり、非常に多くの論考があらわれているが、より多面的な見解を提示できるようになったかは判断が難しい。また、少なくとも一九八〇年代末に始まったクロアチア独立国における犠牲者の数および彼らの民族的・宗教的帰属をめぐる論争は、ユーゴスラヴィアにおける第二次世界大戦の犠牲者の総数に関する議論とともに、いまなお続いている。ここではユダヤ人とロマに加え、全人口の三分の一を占めるセルビア人が迫害の対象となり、犠牲者の多くを占めたことが特徴的である（ホロコーストとジェノサイドの問題は次章で取り上げる）。

クロアチア独立国に関する記述が最もくわしいのは、当然ながらクロアチアの教科書であり、独立国の成立から経済的・文化的状況、抑圧的な政治の実態に触れている。

独立国の成立に関しては、一九九〇年代の教科書にはユーゴスラヴィア王国によって断絶したクロアチア国家の独立回復への願望が背景にあったとする説明が見られた。

現在では同じ立場をとる教科書は一冊のみであるが（Bekavac 2008: 97）、多くのクロアチア人が少なくとも当初はクロアチア国家が復興したものととらえて独立国を支持したといった記述もある（Koren 2007: 125）。ただし、クロアチア独立国が「独立」とは名ばかりで、前述の通りドイツとイタリアの従属国（あるいは傀儡、衛星国）であったことは、どの教科書にも明記されている。また、すべての教科書が、クロアチア独立国ではウスタシャ以外の政党活動が禁止され、指導者アンテ・パヴェリチが独裁的な権限を持ったことや、イタリアとのローマ合意でアドリア海沿岸の広大な領土を失ったことなどに触れている。

文化的状況については、ウスタシャ政権の厳しい監視下にあり、多くの反体制派知識人が排除されたことを前提としつつ、『クロアチア百科事典』など多くの出版物が刊行され、プロパガンダの必要からラジオや映画が発達したなどとして、一定の評価を与える教科書もある（Bekavac 2008: 100）。もはや使用されていない教科書の中にはユー

ゴスラヴィア王国時代に抑圧されていたクロアチア民族文化が発展を見たとの記述もあったが (Mathković 2003: 77; Jurčević 2004: 83)、現在ではそのような形で肯定的に描かれることはない。

ウスタシヤ政権の抑圧的な政治に関しては、「純粹な」クロアチア人国家を形成するためにセルビア人、ユダヤ人、ロマなどを迫害したこと、クロアチア人やムスリムを含む反体制派の政治家や知識人も弾圧したこと、彼らを強制収容所に送ったり殺害したりしたなどが記載されている。クロアチア人も犠牲者(被害者)であるとの立場が強調されているように見える。イタリア支配地域でクロアチア人に対する抑圧的政策が実施されたという記述も (Bekavac 2008: 103-104)、この文脈でとらえることが可能であろう。

ウスタシヤ政権に対するカトリック教会の関与は、しばしば論争となるテーマである。クロアチアの教科書では、大戦後に対敵協力の有罪判決を受けたザグレブ大司教アロイジエ・ステピナツの評価が焦点となる。多くの教科書にステピナツはセルビア人やユダヤ人の迫害に抗議し、ウスタシヤに協力する聖職者を非難したといった記述が見られる。ウスタシヤ政権への最大の敵対者であったとの評価さえある (Jurčević 2004: 84; Bekavac 2008: 101)。カトリック教会自体、迫害された人々を匿い、救ったという記述が

目につく。むしろ、こうした解釈には異論も多く、セルビアの教科書の場合、カトリック聖職者の中にはセルビア人の強制改宗を行い、その殺害を容認した者さえあったとして批判的に描写している (Đurić 2010: 139)。

なお、スロヴェニアの教科書の場合、ステピナツと同じく大戦後に対敵協力の有罪判決を受けたリュブリャナ司教グレゴリイ・ロジュマンおよびスロヴェニア各地のカトリック教会の反共主義・対敵協力の問題に一定の分量を割いている (Dolenc 2003: 93; Razpotnik 2005: 103-104)。対象は異なるものの、問題意識は共有されていると見ることもできる。

II ジェノサイド

クロアチア独立国と不可分のテーマとして取り上げられてきたのが、前述のセルビア人、ユダヤ人、ロマ人などの迫害、とりわけ大量虐殺の問題である。旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書でこの問題に関する言及がないものは存在しない。ユダヤ人に対するホロコーストはもとより、ジェノサイドを「ある人種・民族・宗教に帰属する人々を物理的に消滅させようとする大規模な殺人」などと定義づけ (Erdelja 2007: 262)、その実態をかなりくわしく解説し

ている。むろん、ホロコーストあるいはジェノサイドが問題となるのは、クロアチア独立国に限ったことではない。

セルビアの教科書は、ホロコーストに関わる強制収容所の所在地を示す地図にヤセノヴァツ、ゴスピチ、サイミシュテを載せている (Đurić 2010: 129)。サイミシュテはクロアチア独立国の版図に含まれていたが、実際にはドイツ軍の支配下にあった。また、セルビアの歴史地図帳には「ジェノサイド地図」が掲載され、ユーゴスラヴィア各地の強制収容所七〇カ所が示されているが、このうち四〇カ所程度がクロアチア独立国にあり、その周辺地域がウスタシャによるジェノサイドが行われた場所とされている (Blagojević 2008: 100)。この「ジェノサイド地図」には、ハンガリー、ドイツ、アルバニア、イタリア、ブルガリアの各国によるジェノサイドが行われた場所もあわせて示されている。なお、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの教科書にも、セルビアと同じくヤセノヴァツ、ゴスピチ、サイミシュテを載せた地図を提示しているものがある (Valenta 2007: 119)。

一方、クロアチアの教科書では、学習指導要領に明記されていることもあり、ヤセノヴァツの名前が必ず登場する。しかし、強制収容所の所在地を地図上に示すことは珍しく、現在ではヤセノヴァツ、スタラ・グラディシュカ、ヤドヴノ、メタイナ、スラナ等を載せているアルファ社の

ものが唯一の事例である (Bekavac 2008: 102)。歴史地図帳においても、同じアルファ社がほぼ同じ地図を掲載しているだけである (Ivanović 2008: 32)。連邦時代の歴史地図帳がヤセノヴァツ、スタラ・グラディシュカ、ヤドヴノ、パグ (スラナ)、スレムスカ・ミトロヴィツァ等の強制収容所の所在地を掲載していたことからすれば (Tučić 1985: 15)、取り上げ方が後退したように見える。

ヤセノヴァツ強制収容所があった場所は、現在メモリアル・エリアとして記念博物館や教育センターが設けられている^{*7}。連邦時代、この収容所における犠牲者の数としてしばしば引用されたのは七〇万人という推計値であったが (Boban 1990: 333)、実際には数万人に下方修正するものから一〇〇万人を超えるとするものまで極端に幅があった^{*8}。現在ヤセノヴァツ記念博物館が進めている調査では、犠牲者の数は八万人から一〇万人にのぼると推計されており、すでに八万九十四人の個人データの特定を終えている^{*9}。各教科書はこうした成果を盛り込んで、六万人から一〇万人 (Erdelija 2007: 130)、七万二千人 (Bekavac 2008: 101)、八万人から一〇万人 (Koren 2007: 128) という数字をあげている。また、ヤセノヴァツの犠牲者に関して、各教科書の表現には違いが見られる。多くのユダヤ人、セルビア人、ロマ、そして反ファシスト志向のクロアチア人が犠牲となったという簡潔な記述にとどめるものから (Đurić 2007:

80)、犠牲者の約半数がセルビア人で、残りはユダヤ人、クロアチア人、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム、そしてロマであったとするもの (Bekavac 2008: 101)、さらに「四万五千人〜五万二千人のセルビア人、一万七千人のユダヤ人、一万人のロマ、そして一万人の主としてクロアチア人とボスニア人からなる政治的敵対者」(Koren 2007: 126)といった非常にくわしいものである。いずれにせよ、クロアチア人もまた犠牲者であったという視点は共通している。

かつてセルビアの教科書にはヤセノヴァツにおける犠牲者の推計値を五〇万人とする記述があったが (Rajić 2006: 162)、その後の改訂で、犠牲者の推計値には七万二千人とするものから一〇〇万人とするものまで諸説あり、実証しうるのは七万三千人であるという記述に変わっている (Durić 2010: 153)。なお、この教科書が用いている「セルビア人に対するジェノサイド」という表現は、クロアチアでは一冊だけしか採用しておらず、ここにも歴史認識のずれが生じていると考えられる。^{*10}

そもそも、セルビア人に対する迫害の実態に関しては、クロアチアの教科書では必ずしもくわしい説明があるわけではない。強制収容所への移送と殺害については必ず言及がある一方で、その前段階ともいえるべき国外への強制移住やカトリックへの強制改宗に触れるものはむしろ例外的で

ある (Erdelija 2007: 128)。この点では、セルビアの教科書がセルビア人の迫害の実態、すなわちセルビア人の公職追放、移動禁止、腕章着用、強制移住(追放)から始まり、キリル文字の使用禁止、カトリックへの強制改宗、セルビア正教から「ギリシア東方信仰」への呼称変更、図書館や教会・修道院の破壊、さらには強制(絶滅)収容所への移送、そこでの大量虐殺までを詳述しているのと対照的である (Durić 2010: 151-152)。また、セルビアの教科書は、ヤセノヴァツ収容所ではセルビア人、ユダヤ人、ロマ、反ファシストが犠牲になったと記している。なお、スロヴェニアでも、ヤセノヴァツ収容所の記念碑の写真を載せ、ウスタシャが純粋なクロアチア人・カトリック国家をめざしており、そのためにセルビア人、ロマ、ユダヤ人を殺したと解説している教科書があるが (Rapošnik 2005: 76)、一般的な傾向とまではいえない。この教科書だけが、ホロコースト全般に関してもくわしく説明している。

クロアチアの教科書には、クロアチア独立国だけでなく、ナチス・ドイツが行ったホロコーストに関する記述も多く、ポーランドのアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所や『アンネの日記』なども紹介されている。「第三帝国」における強制収容所一九カ所、絶滅収容所六カ所の分布図を載せているものもある (Bekavac 2008: 116)。クロアチアでは、二〇〇四年からアウシュヴィッツ解放記念日

にあたる一月二七日を「ホロコーストの記憶と人道に対する犯罪防止の日」とし、初等・中等教育機関でホロコースト教育を実施しており、多くの教科書がこの記念日についても言及している。

ホロコーストに関する記述は、セルビアの教科書でも同じ程度にある。ホロコーストに関わる強制収容所の名称を列記し、それらの所在地を示す地図を掲載している。とくにクロアチア独立国におけるホロコーストに関する記述はくわしく、ゴスピチⁱⁱやドヴノの収容所がヨーロッパにおける事実上最初のユダヤ人に対する絶滅収容所となったこと、クロアチア独立国に住んでいたユダヤ人三万九五〇〇人のうち三万五〇〇人が亡くなったこと、ユーゴスラヴィアの他の被占領地域と違ってクロアチア独立国が自らの国家機関を通じてホロコーストを行ったことなどが紹介されている (Đurić 2010: 152)。これに続いて「占領下の」セルビアにおける事例も取り上げられ、サイミシュテとバナツアの強制収容所とそこでの犠牲者に関するくわしい説明やトボヴスケ・シユベ、ニシユ (ツルヴェニ・クルスト)、シャヴァツの収容所への言及がある (Đurić 2010: 153-154)。

III チェトニク

第二次世界大戦中、名目的とはいえ独立を達成したクロアチアと異なり、セルビアはドイツの軍政下に置かれた。

一九四一年八月、傀儡政権としてミラン・ネディチ將軍を首班とするセルビア救済政府が形成される一方、各地で抵抗運動が激化していった。その一つがヨシブ・ブロズ・ティトⁱⁱⁱ率いるバルチザンであり、もう一つがドラジャ・ミハイロヴィチ率いるチェトニクであった。ユーゴスラヴィア連邦時代、チェトニクは対敵協力者とみなされ、肯定的に評価されることは考えにくかったが、近年その見直しが進められているという (柴二〇〇九: 一五)。

セルビアの歴史教科書には、そうした動きが忠実に反映されている。連邦時代の教科書では、チェトニクは占領軍と協力を続け、それは人民に対する最大の裏切り行為であったとの説明がある (Cvetković 1982: 68)。チェトニクはクロアチアのウスタシャやアルバニアのバリ・コンバタール、スロヴェニアの「白衛隊」と同じく「国内の裏切り者」と見なされていた (Danilović 1988: 98)。しかし、現在の教科書では、最も組織化された反ファシスト抵抗運動としてチェトニクとバルチザンの名前があげられ、両者

が当初は協力関係にあったが、のちに対立して「内戦」を引き起こしたとされている (Đurić 2010: 140)。そこでは、ミハイロヴィチがゲリラ的な抵抗運動を初めて組織化したこと、革命的手法をとったパルチザンとは違ってドイツ軍による一般市民への報復を回避する目的もあって待機主義をとったことなど、部分的には肯定的な評価がなされているように見える。パルチザンとの抗争が始まってからの活動に関する描写も、かつてのように一方的に断罪するものではなくなっている。さらに、パルチザン側がヤイツェで開催した第二回ユーゴスラヴィア人民解放反ファシスト評議会 (AVNOJ、一九四三年一月) でユーゴスラヴィアの連邦化を決議したが、その構想ではセルビアがマケドニアやモンテネグロを失って領土が縮小されることになっていた点に触れた上で、ミハイロヴィチが聖サヴァ会議 (一九四四年一月) で提示した連邦構想では、すべてのセルビア人が一つの単位を構成することになっていたとして、両者を対比させているのも興味深い (Đurić 2010: 147-148)。

モンテネグロの教科書は、かつてのセルビアの教科書と同様に、ウスタシャ、バリ・コンバトール、「白衛隊」などと並んで、人民解放運動に敵対した傀儡・対敵協力者としてチェトニクの名前をあげている。一方、モンテネグロはイタリアの占領下に置かれたが、将校や官吏、ブルジョ

ワ政党の党员の間でチェトニク運動が支持されていたこと、ミハイロヴィチの指示によりイタリア軍と協力してパルチザンと戦うようになったこと、そこでバヨ・スタニシチやパヴレ・ジュリシチらが活躍して一時は優位に立っていたことなどが説明されており (Buzanović 2002: 100-101)、再評価の過程にあるようにも見える。

チェトニクに関しては、クロアチアの教科書にも比較的小わしい記述がある。チェトニクが「大セルビア」とクロアチア、スロヴェニアで構成されるユーゴスラヴィア王国の再興を目指したこと、クロアチア独立国ではクロアチア系・ムスリム系住民に対する極悪非道ぶりで知られたこと、ドイツ人やイタリア人、時にはウスタシャとさえ手を結んでパルチザンに対抗したこと、それによってパルチザン、チェトニク、ウスタシャによる「内戦」になったことなどが説明されている (Koren 2007: 130-134)。「大セルビア」の実現のためにクロアチア人やムスリム人など非セルビア系住民の「民族浄化」を行ったとする教科書もある (Erdelija 2007: 12)。多くの教科書が「大セルビア」構想の地図を掲載しているが、それはクロアチアからスラヴォニア地方やダルマチア地方を奪う懲罰的措置を見込んでいたことを示すものとなっている。総じてチェトニクを全面的に否定する評価がなされており、ある教科書には「まったく史実と異なるにもかかわらず、セルビアでは最近になっ

てチュートニクとミハイロヴィチはファシズムに対する闘士であったと公式に宣言されている」という記述も見られる (Bekavac 2008: 122)。チュートニクに対する同じ形での否定的な評価は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの教科書にも見られる (Hadžabić 2007: 109; Valenta 2007: 137)。

クロアチアにおけるクロアチア独立国の再評価とセルビアにおけるチュートニクの再評価は、それぞれの国民の間で十分に支持を得ているとは言い難い面はあるものの、共産党政権下の連邦時代には全面的に否定されていた存在を相対化していこうとする動きであり、自らの問題には弁明的である一方、相手の問題には否定的な要素を強調しがちであるという点でも共通している。また、こうした相対化が、たゞたゞパルチザンとその他の「内戦」当事者の「国民和解」を背景としている点も見逃せない。これと関連して、連邦時代には英雄神話のごとく語られていたパルチザンに關しても、次章で紹介するように否定的な要素が取り上げられるようになっていゝる。

IV パルチザンの「蛮行」

ユーゴスラヴィア連邦時代と比べて、第二次世界大戦の終戦に關する記述が最も大きく変化したのはクロアチアで

ある。現在、クロアチアにおける教科書の多くは、第二次世界大戦に關する章をパルチザンによる犯罪行為としての「ブライブルクの悲劇」と「十字架の道行」で締め括っている。「ブライブルクの悲劇」とは、一九四五年五月、パルチザンによるクロアチア全土の解放に前後してクロアチア軍が多数の民間人とともに国外に脱出し、オーストリアに進駐していたイギリス軍に保護を求めたが、これを拒まれ、ブライブルクでパルチザンに引き渡されたとされる事件である。彼らがユーゴスラヴィア各地の収容所に連行され、多くの犠牲者を出した行程を「十字架の道行」と呼ぶ。いづれも亡命政治家らが一九六〇年代から七〇年代にかけて証言集等を刊行していたが、本国ではタブー視され、少なくとも教科書に記載されることはなかった (Dinđić 2005: 118)。しかし、クロアチア独立前後からこの問題に關心が寄せられ、多くの文献が刊行されるとともに、一九九六年にはクロアチア議會が「ブライブルクの悲劇」が起こつた五月一日前後の日曜日を「クロアチアの自由・独立闘争の犠牲者」の記念日とし、^{*13} クロアチア国内での式典やブライブルクへの訪問を行うようになった。記念日として法制化される以前の一九九五年五月一日から一日にかけて、すでにクロアチア議會によって大規模な五〇周年記念式典が組織されている (Pavlaković 2009: 185)。二〇一〇年にはヤドランカ・コソル首相ら政府代表団が五月一

○日にブライブルクを公式訪問したほか、イヴォ・ヨシボヴィチ大統領が六月二二日の「反ファシスト闘争の日」の直前（六月二〇日）にクロアチア大統領として初めてブライブルクとテズノを訪問した。テズノはスロヴェニアのマリボル郊外にあり、ここでパルチザンに引き渡された人々が殺害されたと考えられている。もっとも、これらは「クロアチアの民族的殉教地」として極右勢力のシンボルとなっていることもあり（佐原二〇〇八：五八）、ステイエパン・メシチ前大統領をはじめとして批判的な立場をとる政治家も多い。^{*15}

クロアチアで独立直後の一九九二年に刊行された教科書において、すでに「ブライブルクでの犯罪とクロアチア民族の十字架の道行」と題する節が設けられていた（Petić 1992: 112）。「十字架の道行」に関しては、一九九一年の読本（副教材）で言及されたのが最初であるとされる（Grabeek 2004: 643）。一九九二年の教科書の枠組みに基づいて新たな学習指導要領が制定されたこともあって、現在にいたるまで、このテーマを取り上げない教科書は存在せず、一頁から三頁程度があてられている。非常にくわしい共産党による収容所や「処刑地」を含む「十字架の道行」の地図を掲載する教科書や歴史地図帳もある。^{*16} とくに「処刑地」は視覚効果を狙ってか髑髏の絵記号で示されているものもあるが、これは先行する『クロアチア歴史地図帳』

の影響とも考えられる。^{*17} 「十字架の道行」に関連して多数の犠牲者を出した土地として、ブライブルクに加えてスロヴェニア領のテズノとコチエウスキ・ログ、クロアチア領のヤゾヴカとマツェリスカ・シユマがあげられている（Bekavac 2008: 131）。

これらの事件による犠牲者数も、その民族的帰属や一般市民の比率などを含めて、しばしば論争の対象となっている。当事者ともいえる共産党政権が不完全な記録しか残さず、イギリスも軍事機密扱いとして文書を公開していないため、未だに正確には把握されていないからである。そのため、個別研究における推計値には六万人から六〇万人まで極端に開きがある（Dizdār 2005: 187）。

当然ながら、こうした問題点は必ずしも出典を示すことが求められていない歴史教科書にも反映されており、曖昧かつ不統一な記述が見られる原因となっている。まず、独立直後の教科書は犠牲者が誰であるかを特定せずに五万人から三〇万人という数字を挙げており（Petić 1992: 112）、中等教育段階の教科書が「多元化」された際にも継承された（Vujčić 1998: 179）。この数字は二〇〇〇年前後に刊行された新たな教科書では下方修正されたものの、現在でも犠牲者が誰であるかを特定せずに数万人とするもの（Erdešija 2007: 154）からクロアチア人だけでも五万人とするもの（Kolar-Dimitrijević 2003: 126）^{*} ちにクロアチア

人だけでも最大七万人とするもの (Bekavac 2008: 130) ま
で幅がある。ここで最大七万人と記載している教科書はヤ
セノヴァツとスタラ・グラディシユカにおける犠牲者数を
七万二千人と記載しているものと同じであり、ウスタシャ
とパルチザンの犯罪行為を相対化する意図があることも指
摘されている (Koren 2009: 256)。

セルビアの最新の教科書にも、オーストリアに逃れた反
パルチザン勢力の人々がイギリス軍政当局に追い返され、
コチエウスキ・ログやブライブルクで殺害されたとの記述
がある。また、この時期のパルチザンによる犠牲者数とし
て最大一〇万人という数字をあげている (Durić 2010:
150)。

一方、モンテネグロの教科書から受ける印象はかなり異
なる。オーストリア方面に逃れようとした人々は、パルチ
ザンに国境地帯で捕まるかイギリス軍によって彼らに引き
渡されたが、その一部は殺されたものの、残りは裁判にか
けられたりユーゴスラヴィア軍に編入されたりしたことが
明記されている (Buzanović 2002: 93)。クロアチアなど
と異なり、パルチザンの犯罪行為を糾弾するような記述は
見られない。

また、スロヴェニアの教科書は、多数のスロヴェニア人
が国外に脱出したことに加え (Razpoinik 2005: 111)、コ
チエウスキ・ログなどでスロヴェニア郷土防衛隊 (ドモブ

ランツィ)の大半が殺されたことを指摘しているが (Dolenc
2003: 105; Kern 2003: 141)、必ずしもクロアチアのように
民族的悲劇として紹介しているわけではない。ただし、二
〇〇五年に大戦中および終戦直後の「集団墓地」に関する
政府の調査委員会が設置され、各地で発掘を続けた成果が
あらわれつつあることから、^{*18} 今後はパルチザンの犯罪行為
に関する記述が変わっていく可能性もある。なお、クロア
チアが重視するブライブルク (スロヴェニア語ではプリベ
ルク) やテズノといった地名はスロヴェニアの教科書には
登場せず、ブライブルクと同じような事態が起ったオー
ストリアのフィクトリング (スロヴェニア語ではヴェトリ
ン) の事例が取り上げられている。

このように、すでに共産党政権からの継承性がほとんど
見られない旧ユーゴスラヴィア諸国では、パルチザンの評
価は大きく変わりつつある。とくに終戦前後に行われた
「蛮行」に関しては、クロアチアを筆頭として、きわめて
批判的に描くことも多くなった。むしろ、ユーゴスラヴィ
アを連邦国家として再建した共産党主導の人民解放運動そ
のものが否定されることはないが、新たな史料の公開が進
めば、さらに多くの問題点が露呈する可能性は高い。皮肉
にも、それ自体は歴史認識の共有につながる要素となるか
もしれない。

むすびにかえて

近年、旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史認識の相違を多少なりとも補正することを目的として数多くの国際会議や共同研究が行われ、その成果が各国の歴史学や歴史教育に反映されつつある。二〇一一年度にはセルビアでも教科書の「多元化」が本格化し、競争的な環境のなかで、これまで以上に教科書の個々の問題点が改善されていくことが期待される。もはや、歴史教科書こそがヨーロッパ統合過程への参入の妨げになるといわれた時期とは状況が異なることは確かである (Goldstein 2009: 25)。

しかし、これまで検討してきたような個々の事象に関する評価の違いは各国の歴史教科書の記述からも歴然としており、いったん成立した国民史からユーゴスラヴィア諸民族に共有される広範な地域史に回帰する動きが見られるわけでもない。なお国家間・民族間の対立が解消していない地域にあつて、相互の無関心や無理解がふたたび不和を助長する危険性もある。住民の多くに共有される新たな歴史認識を生み出す努力が求められるのではないか。

●注

*1 教育制度自体、各共和国で若干の違いが生じる場合もあったが、初等教育（小学校Ⅱ義務教育）が八年間、中等教育が四年間で、とくに小学校五～八年生向けに「歴史」が存在し、五年生で古代史、六年生で中世・近世史、七年生で近代史（第一次世界大戦を含む）、八年生で現代史を学ぶこと、各学年で異なる教科書を用いることなどは共通していた。また、クロアチアのシュコルスカ・クニガ社やセルビアの教科書・教材局のように各共和国に独自の教科書出版社（またはそれに該当する国家機関）が存在したが、教科書自体はすべて異なるわけではなく、同じ教科書が複数の共和国で共用されることもあった。

*2 クロアチアとセルビアを除き、初等教育は九年制に移行しつつあり、「歴史」は六～九年生向けの科目となった。また、各学年の時代区分も多様化し、たとえばセルビアでは五年生で古代史、六年生で中世史、七年生で近世・近代史（一八七八年まで）、八年生で近現代史を、またスロヴェニアでは六年生で導入、七年生で古代・中世史、八年生で近世・近代史（第一次世界大戦を含まない）、九年生で現代史を学ぶことになっている。

*3 第二次世界大戦を取り上げている歴史教科書（小学校八年生または九年生向け）に関しては、クロアチアは四種類、スロヴェニアは三種類、セルビアは五種類から選択する形をとっている（各国教育省のサイトに掲載された二〇一一年度教科書目録による）。その他の国々はカリキュラムの移行期にあたるため、教科書の取り扱いも流動的である。

*4 クロアチアにおける小学校八年生向け歴史教科書の事例では、第二次世界大戦に関する記述は一九六三年版で六五頁 (Buranović 1963: 93-157) 、一九七六年版で八一頁 (Jelić 1976: 43-123) 、一九八七年版で九四頁に達していたが (Lovrenčić 1987: 77-170) 、独立後の一九九二年版で三四頁 (Perić 1992: 81-114) 、一九九八年版で二四頁にまで激減した (Perić 1998: 63-86) 。現行教科書四種類は三二―五二頁を第二次世界大戦にあてているが (Durić 2007: 83-113 ; Erdelija 2007: 112-159 ; Koren 2007: 103-154 ; Bekavac 2008: 88-135) 、大判化しており情報量は多い。なお、同じくセルビアの場合、一九八二年版で五九頁、一九九三年版で三二頁、二〇〇五年版で三八頁となっている (Cvetković 1982: 54-112 ; Gačša 1993: 97-138 ; Rajić 2005: 125-162) 。¹⁾ ²⁾ ³⁾ 教科書の「多元化」に伴い、現行教科書では三〇頁から五五頁まで幅がある (Ljusić 2010: 149-203 ; Pavlović 2011: 97-126) 。

*5 ユーゴスラヴィア全体での犠牲者数をあげるケースは少ないが、クロアチアの教科書で一〇二万七千人 (Erdelija 2007: 158) 、セルビアの教科書で一五〇万人 (Durić 2010: 128) 、スロヴェニアの教科書で一六二万八千人 (Dolenc 2003: 85) といった数値が見られる。クロアチアの数値はヴラディミール・ジェリャヴィチの研究成果から引用したと思われる (Željavić 1989: 71) 。連邦時代の公式発表では一七〇万六千人とされ、教科書にも反映されていた (Cvetković 1982: 112) 。

*6 ロジューマンは軍事法廷における欠席裁判で対敵協力の有罪判決を受けたものの、実際には国外に逃亡して受刑しな

かった。スロヴェニア独立後に名誉回復の動きが強まり、二〇〇七年にスロヴェニア最高裁で有罪判決を無効として地方裁判所に差し戻す判決が下されている (*The Slovenia Times*, 11.10.2007) 。独立後のスロヴェニアでは「カトリック教会との国民和解」が進んだとされる (柴二〇〇九: 一一) 。

*7 ヤセノヴァツ・メモリアル・エリアはかつてボスニア・ヘルツェゴヴィナのドーニャ・グラディナ地区を含んでいたが、連邦解体後にドーニャ・グラディナ・メモリアル・エリアとして分離した。現在では強制収容所からの「解放」記念日にあたる四月二二日前後にクロアチア政府がヤセノヴァツで、またボスニア・ヘルツェゴヴィナを構成するセルビア人共和国がドーニャ・グラディナで、それぞれ記念式典を開催しており、そこの政治家らの発言が物議を醸すことも多い。四月二二日はセルビアでは「第二次世界大戦中にウスタシャのクロアチア独立国でセルビア人、ユダヤ人、ロマに對してなされたジェノサイドの犠牲者を追悼する日」とされており、二〇一〇年のドーニャ・グラディナの式典にはボリス・タデイチ大統領が出席した。

*8 ザグレブ大司教・枢機卿のフラニョ・クハリチは四万人、クロアチア初代大統領フラニョ・トゥジマンは五万人という数字を挙げたとされる (Mirković 2000: 6) 。

*9 二〇一〇年四月一八日までの調査結果。民族的帰属が特定された犠牲者の内訳は、セルビア人が四万五九二三人、ロマが一六〇四五人、ユダヤ人が一万二七六五人、クロアチア人が四一九七人、ムスリムが一三一人となっている (<http://www.jusp-jasenovac.hr/>) 。

- *10 「セルビア人に対するジェノサイド」(Koren 2007: 127) 以外では「セルビア人に対する抑圧的政策」(Đurić 2007: 90)、「セルビア系住民に対するテロル」(Erdejlja 2007: 128)、「セルビア系住民の大規模な殺害」(Bekavac 2008: 101) などと表現されている。
- *11 *Priprema za Dan sjećanja na holokaust. Upute nastavnici*. Zagreb: Ministarstvo znanosti, obrazovanja i športa, 2006.
- *12 Ivo Bogdan, ed., *La tragedia de Bleiburg (Studia Croatica)*. Buenos Aires: Instituto de Cultura Croata, 1963; John Prcela et al. eds., *Operation Slaughterhouse. Eyewitness Accounts of Postwar Massacres in Yugoslavia*, Philadelphia: Dorrance, 1970; Vinko Nikolić, ed., *Bleiburška tragedija hrvatskog naroda*. München and Barcelona: Knjižnica Hrvatske revije, 1976. 453p°
- *13 Zakon o blagdanima, spomendanu i neradnim danima u Republici Hrvatskoj. *Narodne novine*, br. 33, 1996.
- *14 Odluka o osnivanju Odbora za obilježavanje 50. obljetnice Bleiburških žrtava i žrtava Križnog puta. *Narodne novine*, br. 20, 1995.
- *15 *Jutarnji list*, 22. 06. 2010. (<http://www.jutarnji.hr/>) (11 〇1 〇年六月二二日) ほか参照。
- *16 「十字架の道行」の地図を掲載している教科書はアルファ社のもののみ (Jurčević 2004: 99; Bekavac 2008: 131)°。別冊歴史地図帳では「ニコルスカ・クニガ社・アルファ社のもののみ」(Brkljačić 2007: 33; Ivanković 2008: 41)°。

- *17 Krešimir Regan, ed., *Hrvatski povijesni atlas*. Zagreb: Leksikografski zavod Miroslav Krleža, 2003. p.292. 「第三帝国」の強制収容所やテロルなどの犯罪が行われたとされる場所、さらにいえば「祖国戦争」においてセルビア人側の犯罪が行われたとされる場所と同じ標識の絵記号を用いていることが問題視されている (Koren 2009: 257-260)°。

- *18 二〇〇七年末までにスロヴェニア国内五七カ所の「集団墓地」の調査が行われている (Ferenc 2008: 155)°。現在五九四カ所で調査が進み、犠牲者数の推計は八万人以上になるとされる。
Slobodna Dalmacija, 10. 01. 2011. (<http://www.slobodnadalmacija.hr/>) (二〇一一年一月一〇日) 参照°。

●参考文献

- 〈歴史教科書・地図帳〉
- Bekavac, Stjepan, et al. (2008) *Povijest 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*. Zagreb, Alfa.
- Blagojević, Miloš, et al. (2008) *Istorijski atlas*. 7. izd. Beograd: Zavod za udžbenike.
- Brkljačić, Maja (2007) *Povijest u kartama i slikama: povijesni atlas za 8. razred*. Zagreb: Školska knjiga.
- Burzanović, Slavko, et al. (2002) *Istorija za VIII razred osnovne škole*. Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.
- Cvetković, Slavojub, et al. (1982) *Istorija sa osnovama socijalističkog smoupravljanja za VIII razred osnovne škole*. Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.
- Daniilović, Biljana, et al. (1988) *Poznavanje društva za 4. razred*

osnovne škole. Novi Sad: Zavod za izdavanje udžbenika.

Dolenc, Ervin, et al. (2003) *20. stoljeće: Zgodovina za 8. razred osmeltke i 9. razred devetletke*. Ljubljana: DZS.

Duranović, Šarić, et al. (1963) *Prošlost i sadašnjost 3: udžbenik historije za VIII razred osnovne škole*. Zagreb: Školska knjiga.

Đurić, Dorde, et al. (2010) *Istorija za osmi razred osnovne škole*. Beograd: Zavod za udžbenike.

Đurić, Vesna (2007) *Povijest 8: udžbenik povijesti za osmi razred osnovne škole*. Zagreb: Profil.

Erdelja, Kresimir, et al. (2007) *Tragom prošlosti 8: udžbenik povijesti za osmi razred osnovne škole*. Zagreb: Školska knjiga.

Gaćeša, Nikola, et al. (1993) *Istorija za 8. razred osnovne škole*. Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.

Hadžlabdić, Hadžija, et al. (2007) *Historija: udžbenik za osmi razred osnovne škole*. Tuzla: Bosanska knjiga.

Ivanković, Zvonko, et al. (2008) *Povijesni atlas 8: za 8. razred osnovne škole*. Zagreb: Alfa.

Jelić, Ivan, et al. (1976) *Narodi u prostoru i vremenu 4: udžbenik povijesti za VIII razred osnovne škole*. Zagreb: Školska knjiga.

Jurčević, Josip, et al. (2004) *Povijest 8: udžbenik za 8. razred osnovne škole*. Zagreb: Alfa.

Kern, Ana Nuša, et al. (2003) *Naše stoljeće: zgodovina za 8. razred osnovne škole, zgodovina za 9. razred devetletne osnovne škole*. Ljubljana: Modrijan.

Kolar-Dimitrijević, Mira, et al. (2003) *Povijest 8. Udžbenik iz*

povijesti za 8. razred osnovne škole. Zagreb: Meridijani.

Koren, Snježana (2007) *Povijest 8: udžbenik za 8. razred osnovne škole*. Zagreb: Profil.

Loventić, Rene, et al. (1987) *Čovjek u svom vremenu: udžbenik povijesti za VIII. razred*. Zagreb: Školska knjiga.

Lučić, Ivan, et al. eds. (1987) *Povijesni atlas za osnovnu školu. XIV izmijenjeno i dopunjeno izdanje*. Zagreb: Kartografijska učila & Školska knjiga.

Ljusić, Radoš, et al. (2010) *Istorija za osmi razred osnovne škole: udžbenik, istorijska čitanka, radna sveska*. Beograd: Freska.

Matković, Hrvoje (2003) *Povijest 8: udžbenik za VIII. razred osnovne škole. IV. izdanje*. Zagreb: Školska knjiga.

Pavlović, Zoran, et al. (2011) *Mozaik prošlosti 8: udžbenik istorije za osmi razred osnovne škole sa istorijskim kartama i odabranim istorijskim izvorima*. Beograd: BIGZ školsvo.

Perić, Ivo (1992) *Povijest za VIII. razred osnovne škole*. Zagreb: Školska knjiga.

Perić, Ivo (1998) *Povijest za VIII. razred osnovne škole. 3. izdanje*. Zagreb: Alfa.

Rajić, Suzana, et al. (2005) *Istorija za 8. razred osnovne škole*. Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva.

Razpotic, Jelka, et al. (2005) *Raziskujem preteklost 9: učbenik za zgodovino za 9. razred osnovne škole*. Ljubljana: Rokus Klett.

Valenta, Leonard (2007) *Historija - Povijest za 8. razred osnovne škole*. Sarajevo: Bosanska riječ.

Vujić, Ivan (1998) *Povijest: Hrvatska i svijet u XX. stoljeću. Učbenik za četvrti razred gimnazije*. Zagreb: Birotehnika.

(イェウ)

Boban, Ljubo (1990) *Kontroverze iz povijesti Jugoslavije*. 3. Zagreb: Školska knjiga.

Dizdler, Zdravko (2005) Prilog istraživanju problema Bleiburga i Križnih putova (u povodu 60. obljetnice). In: *Serijski zbornik*. 32.

Ferenc, Miha (2008) Secret World War Two Mass Graves in Slovenia. In: Peter Jambrek, ed. *Crimes Committed by the Totalitarian Regimes*. Ljubljana: Slovenian Presidency of the Council of the European Union.

Goldstein, Ivo (2000) O udžbenicima povijesti u Hrvatskoj. In: *Dijalog povjesničara - istoričara*. 3.

Grabek, Martina (2004) *Bleiburg i Križni put* u hrvatskim udžbenicima povijesti. In: *Dijalog povjesničara - istoričara*. 9.

Kisić Kolanović, Nada (2002) Povijest NDH kao predmet istraživanja. In: *Časopis za suvremenu povijest*. 34-3: 679-712.

Koren, Snježana, et al. (2001) Slika naroda s prostora prijašnje Jugoslavije u hrvatskim udžbenicima povijesti. In: *Dijalog povjesničara - istoričara*. 6.

Koren, Snježana (2009) Nastava povijesti između historije i pamćenja. Hrvatski udžbenici povijesti o 1945. godini. In: Bosto, Sulejman, et al. eds, *Kultura sjećanja: 1945. Povijesni lomovi i seladavanje prošlosti*. Zagreb: Disput.

Mitković, Jovan (2000) *Otkriveni izvori i literatura o jasenovačkim logorima*. Laktaši: Grafo Mark. Banja Luka. Besjeda, Beograd. Muzej žrtava genocida.

Najbar-Agičić, Magdalena (2000) Promjene u prikazu Drugoga svjetskog rata u hrvatskim udžbenicima povijesti u posljednjih četvrt stoljeća. In: *Dijalog povjesničara - istoričara*. 4.

Pavlovic, Vjera (2008) *Opet Za dom spremni*. Desetotražnjaške komemoracije u Hrvatskoj nakon 1990. godine. In: Bosto, Sulejman, et al. eds, *Kultura sjećanja: 1941. Povijesni lomovi i seladavanje prošlosti*. Zagreb: Disput.

Pavlaković, Vjera (2009) Komemorativna kultura Bleiburga, 1990-2009. In: Bosto, Sulejman, et al. eds, *Kultura sjećanja: 1945. Povijesni lomovi i seladavanje prošlosti*. Zagreb: Disput.

Žerjavić, Vladimir (1989) *Gubici stanovništva Jugoslavije u drugom svjetskom ratu*. Zagreb: Jugoslavensko viktimoško društvo.

佐原徹哉 (二〇〇八) 『ボスニア内戦』有志舎。

柴宜弘 (一九九六) 『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店。

柴宜弘 (二〇〇九) 「バルカン現代史研究の現状と課題——旧ユーゴ諸国の第二次世界大戦史研究を中心として」『史学研究』二二六三、一—二二〇頁。

(ふしだ・しんいち／跡見学園女子大学文学部)